第３３０回　令和８年１１月１６日（月）

「お金と良心」

外国人登山客が通行禁止の期間に富士山に弾丸登山をして救助されるニュースが度々報道されます。山岳救助隊は警察官なので救助活動には多額の税金が使われることになります。要救助者の自己負担があるのかどうか、はっきりとわかりませんが、自業自得と感じてしまうのは無理もないかと思います。

また富士山のゴミ問題も深刻です。多くの観光客が山にゴミを不法投棄しています。日本人の心ともいえる富士山が汚されることは腹立たしい限りです。

そこで関係者は入山料を取ることにしました。４０００円近い入山料は決して安いとは言えません。それでも富士山で働く人たちの給料がこれですべて賄えるとは思えません。救助隊は富士の頂上から救助者を背負って下りてくるわけです。この重労働に見合う額であるとは到底考えられません。

外国人観光客が入山料を拒むことはほとんどありません。アメリカのグランドキャニオンの入館料は何倍もしますし、エベレスト登山には１００万円単位の税金をネパール政府に支払う必要があります。円安もあり、むしろ格安と言った感覚でしょう。

お金を払ったからと言ってゴミを堂々と捨てる客もいます。入山料は環境を保全するための費用だから、これで清掃するアルバイトを雇うべきだという考え方で、気兼ねなくゴミを放置します。入山料が裏目に出てしまうケースといえます。

保育園の親のお迎えが決められた時間をオーバーするケースが多いので罰金制度をとり入れました。すると罰金を支払うことで良心の呵責がなくなって、逆にオーバーする事案が増えてしまったそうです。実際私も部活の顧問をやっていたころ、どうしても間に合わず、罰金の５００円を握りしめてお迎えに行きました。良心の呵責はありましたが、今月分ということで５００円玉を準備していたことは事実です。

外国で無賃乗車が後を絶たず、罰金制度をとりいれました。すると無賃乗車をしていたグループは自分たちで保険をつくり、月々の会費を納めて捕まって罰金を支払うときに保険から出せるようにしました。月々の保険代は電車代を真面目に払うより安かったそうです。
そのグループの主張は「もともと公共交通機関は無料であるべきだ」というものでした。

ＣＯ２の排出量が多い国が、少ない国にお金を払うことで排出量のノルマを買ってもらうシステムが実在しています。何か本末転倒のような気がします。